

大和国侍の事

一、添下郡の筒井順慶は、先祖は近衛家の末裔という言い伝えである。祖父を順政といひ、父を順興という。元は南都（興福寺）の衆徒の家柄であったという。順慶は才知にたけた人物で、武力をもって大和国の半分以上を支配し、筒井に平城を築いて居城した。自ら所有する領地は六万石ほどであったが、大和国内には順慶の一族が大勢いた。応仁年中（一四六七〜一四六九）以来数度にわたり大和国は大乱状態となったが、順慶はあちこちで武功をあげて、ついに敵に屈することなく各勢力を統一した。

そのようなところ、松永久秀が筒井城を手に入れるべく大軍を法隆寺まで進めたため、順慶も筒井より二・二キロメートルほど西の梅檀木村というところまで出陣した。先陣の島清興（左近）・松倉重信の兩人に大和国の国侍が付き従って、並松というところに陣を張り、松永の軍勢と対峙した。戦闘がはじまって、松永の先陣が敗北した。それを順慶の先陣が追討した。

しかしあまりに深追いしたため、法隆寺のうちに隠し置いた松永の伏兵の奇襲を受けて、総崩れとなった。順慶の軍勢は混乱して筒井城へ入ることができず、そのまま東の山中の宇陀郡へ逃げ去った。そのころ宇陀城には秋山直国という人がいた。これも順慶に縁のある人で、順慶はこの城に滞在し、なんとか代々の領地である筒井庄へ帰ろうと策略を練っていた。松永も宇陀へ軍勢を差し向け一戦を交えようと計略をめぐらせていたが、その時は大和国の国侍は誰も松永に従わなかった。その上高取城には越智氏、十市城には十市遠長という順慶の一派が居城していた。この二つの城は道が細く険しい山にあり、また宇陀には番坂という山を切り開いて作った道が入り口にあったので、簡単に攻め入ることはできなかった。南都東大寺の少し北には小高い山があった。松永はその南の谷川を要害として、ここに多聞造りの城を築き、大和国を一度に平定するつもりであったが、国侍の多くはこれに従わなかった。

一方、順慶は辰市城主である井戸